# 戒めの物語

## イーシャ・サーデサイによる再話

*一日の終わりが近づき、太陽は空に低く傾き、村の広場の光は柔らかでした。すべては静寂でした――ある種の張り詰めた予感で静まり返り、それをとても不気味な静寂と言う人もいるかもしれません。ゆっくりと、男は足を引きずって歩いていました。肩は落ち、体に埋没しているようでした。両足首に巻き付いている太い鎖が許す数インチばかりの歩幅で彼が歩みを進めると、足元にはほこりの小さな雲が舞い上がりました。*

彼の両手もまた縛られており、手錠の鎖は、彼の右側にいる、がっしりとした体格で角張った顎の看守によってしっかりと握られていました。左側には別の看守が、後ろには3人目がいて、男が一つ所に長く止まろうとすれば、いつでも彼を小突いたり蹴ったり押したりする準備ができていました。灰色の岩と、同じく灰色の砂が混じり合った地面に目を落としたままだった男は今、目を上げました。人々が集まっていました――大勢の群衆が居並び、男を見詰めていました。中にはもっとよく見ようと首を伸ばしている人々もいました。男は群衆のそばを歩き、無表情で、その視線は諦めたようにぼんやりし、既に死んでいました。

集まった人々はささやき始めました。何て運命は変わってしまったのか！ 手足を縛られ、髪はもつれ、顔には泥がこびり付いたこの男は、何年も私たちの中でカリスマ的存在として生きてきたあの男と本当に同じなのか？　誰もが大好きになり、引き付けられた男――子どもの頃から誰もが憧れてきた男なのか？　彼はとてもハンサムで、とても魅力的でした。彼の物腰には欠点がありませんでした。そして、彼がわずかに顔をゆがめていたずらっぽい笑いをちらりと見せると――それはいつも人々が思ってもみない時でしたが――人々は彼を知りたい、助けたい、信頼したいと思わずにはいられなかったのでした。

太陽は空に傾き、男は重い足取りで歩を進めていました。もはや絞首台は、それほど遠くではありません。彼の目に映る傍観者たちは、ぼやけてくすんだ茶色で一つに混ざり合っていました。つえを突いた男、すきっ歯の子ども、鉄灰色の巻き毛の、唇を震わせる女性…

男が不意に立ち止まると、金属のぶつかる音がしました。彼の目の奥深くの薄暗い空間に、光が揺らめき続け――そして、燃えているように見えました。男は、いぶかしげに彼を見ていた看守の方を振り向きました。

「私が死ぬ前に、最後のお願いが一つあります!」男はいきなり激しく話し、それからより抑えた声で続けようと、一呼吸置きました。「この群衆の中に、メッセージを伝えたい人がいます。どうか私の頼みを聞き入れてくださいませんか？」

看守たちは互いにちらりと見合い、無言で相談しました。彼らは囚人に向き直り、素っ気なくうなずきました。

「深く感謝いたします」

そうして、看守たちがすぐ後ろで鎖を持ったまま、男は足を引きずって群衆の中に入って行きました。新たな力で――切迫感さえ漂わせて――前に進み、やがて彼は、少し前にちらりと目にした白髪交じりの女性の真正面に来ました。

近くで見ると、男はこの女性が泣いているのが分かりました。彼女の目はぬれて見開き、顔には涙の染みがありました。男が彼女の前に立つと、彼の頭は少なくとも彼女のそれより 1 フィート上にありました。女性は話そうと口を開きました。出てきたのは、しゃっくりのようなきしむ音だけでした。

男は彼女の方に、とてもゆっくり、極めて少しずつ、まるでスローモーションのように体をかがめました。彼の顔はほとんど彼女に触れそうになり、ほんの一瞬、彼女の頬にキスしようとしているかに見えました。しかし、顔をゆがめるように口の端を持ち上げ、歯をむき出して、そして――

ガブッ！

女性は悲鳴を上げて飛びのき、温かく赤い血が手で覆った耳から顔の側面に流れ落ちました。

「な、な、なぜこんなことしたの？」　彼女は尋ねました。痛み、混乱、信じられない気持ちで、彼女は声を詰まらせました。「おまえ――おまえは私の耳たぶをかみ切ったのね！」

男は彼女の前で地面に唾を吐きました。

「母さん」と、彼は低い、威嚇するようなうなり声で言いました。 彼の顔は嫌悪感でゆがんでいました。

「母さん」と、男は繰り返しました。「教えてくれ、なんで俺は今日死ぬんだ？」

この男の母親であるその女性は、すすり泣き、それ以外できることはなさそうでした。血まみれの耳をつかみ、歯をカチカチ鳴らし、新たな涙が彼女の顔にあふれ出ました。

「さあ、」と、同じ冷たい声で男は言いました。「時間はあまりないんだ」

どもりながら、やっと彼女は言いました。「な、なぜって、おまえが盗みを働いたと皆が言っている！　私のいとしい息子、おまえが人々を殺したと皆が言っている！　わ、私は本当だなんて信じることができない、だけど…」。 血が彼女の手に滴り続け、彼女の声は次第に小さくなりました。

「できない？」 男は静かに言いました。「信じることができない？　もしそうなら、母さん、思い出させてあげるよ。俺が小さな子どもだった頃に戻ろうじゃないか、ほんの2、3歳だった頃に。その頃始まったんだ、そうだよね？　俺が人から物をくすねる癖がついた頃だ」

「でもそれはささいなことだったわ！」 母親は強い口調で言いました。「おもちゃや小物。おまえはとても幼かったし、ほんの赤ちゃんだった――おお、そして本当にかわいかった――それで、おまえがあれこれ取っても、誰も気にしなかったのよ」

「俺がもう少し大きくなって、学校に通っていた時はどうだったろう？　俺が同級生の持ち物をどうやって盗み始めたか覚えているか？　どうやって俺がそれを遊びにして、もっと、もっと、もっと盗んだか覚えているか？」

「ええ、でも――」

「そしてその時、母さんは何て言った？」 男は問いただしました。「母さんは笑って、何て賢い子なの、と俺に言ったんだ。非の打ち所のない子で、何があってもそれは変わらないって言ったんだ」

「おまえは世の中に好奇心を持っていただけだわ！自分を表現していたのよ！」と、母親は言いました。「それにおまえは、まだとても若かったし」

「俺がさらに大きくなって、盗みが本当に上手になって、さらに楽しむようになった時はどうだったろう？　俺は女性の喉元からネックレスをするりと外し、哀れな老人のポケットから財布を抜き取ったものだ。俺は誰彼を問わずお金をだまし取った。そしてやつらが俺を追い掛けて来ると思った時は、どうやって追い払うかを知っていた。そんな時、母さんは俺に何と言った？」

「私はなぜおまえがこんなことをしているのか分からない」と、母親は必死になって言いました。「おまえが何を証明しようとしているのか分からない。私はずっとおまえをどんなに愛しているかと言っていただけなのに！」

「そうだね」と、その男は気味の悪い満足感を込めて言いました。「その通りだ。母さんはいつもそう俺に言っていた。俺が成長する間に、母さんが俺に言ったことはそれだけだ。『おまえは素晴らしい。おまえは特別。おまえは偉大。おまえはすごい。おまえが何をしてもそれは変わらない。私のいとしい子。おまえを愛している。おまえを愛している。おまえをとっても愛している！』

その男の声は村の広場に響き渡りました。近くの木の方向から、耳障りな大きな鳴き声がして、驚いた数羽のカラスが飛び立ちました。

「そして母さん、知ってるかい？」男はつぶやき声に戻って言いました。「俺は信じていたんだ！　母さんが言うすべての言葉を信じ込んでいた。教えてくれ。俺が何をしようと母さんが朝から晩までこんなふうに言っていたら、俺はどうやって善悪の区別を身に付けられたというんだ？」

「だから母さん、今になって泣かないで」。男は続けました。「これは母さんが俺に用意してくれたベッドだ。これは母さんが俺に形作ってくれた運命だ。母さんの褒め言葉のせいで、文字通り俺は死ぬんだ。だから続けて。褒め続けて。俺がすることすべてがどれだけ偉大か言って。俺が間違いなんか犯しっこないって言って。母さんが言っているその愛を、俺に見せてくれ」

男は最後の軽蔑のまなざしを母親に向け、絞首台に上がりました。太陽はほとんど地平線に溶け込み、血のような赤い色素がオレンジ色の空に染み込んでいきました。群衆は罵声を浴びせました。人波の中のどこかから、かすかなむせび泣きが聞こえました。

© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。